埼玉県消防学校

第１５２期救急科を実施しました

［期　　間］　令和６年１月１７日（水）から３月６日（水）まで

３４日間

［会　　場］　埼玉県消防学校

所属消防本部（局）

［到達目標］　救急医学に関する基礎知識に基づき、応急処置時における的確な観察・判断能力、応急処置に必要な専門的技能を修得し、救急隊員として活動できる。

［教育対象］　救急業務に従事させようとする者（日赤救急員の有資格者、初任教育救急講習修了者又はこれらと同等以上の知識技能を有する者）

［修 了 者］　２４消防本部（局）８９名

平均年齢２５．５歳

埼玉県南西部消防局　　水村　博明　消防司令補　＊第１小隊総代

修了しての感想

救急科修了に当たり、学生のために環境を整えていただいた専科教官、座学講師及び実技教官の方々に感謝申し上げます。

私は、救急に関する知識がほとんどなかったため、最初は自分の中で理解が進まず苦戦しました。しかし、ある時期を境に今まで学習してきた内容が自分の中で結びつき始め、救急に対する興味が増していくことで急激に理解が進み、救急の面白さを感じました。

救急科は修了しましたが、医療の世界で見れば圧倒的に知識量が不足しています。今後も救急科で得た学びの楽しさを忘れずに勉学に励み、知識及び技術の習得に努めていきたいと思います。全ては県民の笑顔のために。

後輩へのメッセージ

救急科での学びは業務だけでなく、私生活においても役立てることのできる貴重なものです。

これから入校する学生は救急に興味を持ち、ＯＮ・ＯＦＦを問わず、仲間と思いっきり楽しみながら学習及び訓練に励んでもらえればと思います。

川越地区消防局　　猿渡　勝公　消防士長　＊第２小隊総代

修了しての感想

第１５２期救急科を修了して、学生８９名のみんなと修了することができて嬉しく思っています。これまで支えてくれた２人の教官と講義や実技で親身になって教えていただいた各消防本部の皆様に、学生代表としてお礼申し上げます。本当にありがとうございました。

この素晴らしい環境で、約１か月半、勉学に励むことができたのも、学校関係者、専科教官、支援教官、各消防本部の皆様、多くの方々に見守られ、８９名は現場に戻っていきます。

この救急科で学んだ一つ一つを忘れずに、これからも日々精進していきたいと思います。そして、消防の任務を全うしていきたいと思います。ここで出会った仲間を大切にし、これからも埼玉県のために力を尽くしていきたいと思います。

後輩へのメッセージ

救急科は日々の生活や緊急時に必要な応急処置など、消防職員としてだけではなく、生きていく中で必要な知識・技術を学べる場だと思います。専科教育の中でも期間は長く、期間中は救急の勉学に特化できるので、たくさん失敗や疑問意識をもって取り組めば、必ず自分の力となると思います。

また、多くの仲間と出会うことができ、訓練を重ねるにつれて絆も深まってきます。素晴らしい仲間とたくさんコミュニケーションを取り、人脈を広げ、訓練に励んでいってください。

春日部市消防本部　　高野　康太朗　消防士長　＊第１小隊副総代

修了しての感想

　まず初めに学校教官、講師の方々たくさんの学びを与えてくださりありがとうございました。救急科に入校することにたくさんの不安もありましたが、一日一日がとても充実した日々となりました。

　座学の授業では普段聞きなれていないこともあり、とても難しいと感じ、実技では、救急活動の大変さを学ぶことができました。学校入校中は毎日が大変だと感じることもありましたが、仲間がいたからこそ、とても有意義な時間を過ごすことができました。この救急科での学びを糧に市民に寄り添った活動をしていきたいです。

後輩へのメッセージ

　救急科に入校することにいろいろな不安があるかもしれませんが、学校教官、講師の方々そして同じ学生の仲間たちのおかげで、たくさんの知識や技術が身に付けられます。失敗を恐れず、積極的に授業や実技に臨んでください。そして、救急科の３４日間、一日一日を仲間と共に大切にしてください。きっとかけがえのない日々となるでしょう。

吉川松伏消防組合消防本部　　篠田　博繁　消防士長　＊第２小隊副総代

修了しての感想

救急科を修了して率直に思ったことは、救急に対して苦手意識がなくなり、知識欲が強くなっていたことです。入校当初は救急に対する意欲や知識が乏しかったため不安を感じていましたが、専科教官や各消防本部の講師の方々が一つ一つ丁寧に順を追って説明をしてくれたので、人体の生理学や解剖学、各疾患の因果関係も理解しやすく、学ぶ楽しさを知りました。実技に入ってからは病態の鑑別や処置の仕方など講義で学んだことが活動に繋がり、得た知識が知恵として変わっていくのを実感することができました。

救急は消防吏員を続ける上で必要不可欠な業務だと再認識し、救急科を修了した後も自らが学び続け、常に新しい知識・技術を取り入れなければならないと痛感しました。

結びになりますが、専科教官並びに各講師の皆様に感謝申し上げます。大きな怪我や事故もなく、楽しく学ぶことができたのは皆様の支援があったからこそだと深く思います。３４日という長い期間、大変お世話になりました。

後輩へのメッセージ

消防吏員である以上、救急業務は切っても切れない存在です。人命に直結する業務となるため、苦手意識を持つ方も多いかと思います。救急科を希望して入校する人もいれば希望していないのに入校する人もおり、皆さんの気持ちは様々だと思います。しかし、どんな気持ちで入校しようとも、救急科では各教官方が皆さんのために夜遅くまで訓練カリキュラムの作成や訓練設営などの環境を整えてくれています。一日一日を大切にしてください。そして救急科で出会った仲間と共に楽しく、時には厳しく、支え合いながらたくさん失敗してください。現場での失敗は人の生死を左右するため、絶対に許されませんが、ここではいくら失敗しても人が死ぬことはありません。恥ずかしがらず、自分の思ったこと、閃いたことは全力で実施してください。ここでの失敗は必ず現場で活きてくる時があると思います。

３４日間は長いようで非常に短いです。事前課題を真剣に取り組むか、取り組まないかでその時間差は大きく変わります。後悔を残すことなく救急科を修了することを祈願しております。

救急科教育訓練の様子

座学

心肺蘇生訓練

外傷訓練

分娩介助訓練

車外救出訓練

シミュレーション訓練